

修復とオーセンティシティ

—カンボジア、アンコール遺跡群

いしむら とも
石村 智 東京文化財研究所主任研究員

長らく無形の文化遺産や文化財を紹介してきた本コーナーでは、今月号から、有形の文化遺産を中心にとりあげる。世界遺産の修復においても、過去の営みをいかに伝えるかという、人間くさい議論がおこなわれている。

さまざまな修復の理念

長年にわたる内戦が終結した翌年の一九九二年、カンボジア・アンコール遺跡群はユネスコ世界遺産に登録されると同時に「危機遺産」リストにも記載された。それを受けて日本をはじめ十数カ国が、内戦中に荒廃したアンコール遺跡群の修復事業に参加することとなり、あたかも「修復オリンピック」の様相を呈した。しかし修復をめぐる「真性」をいかに保つかという点

においてさまざまな議論がある。オーセンティシティとは、遺跡のオリジナルな状態が確保されていることを意味する。アンコール遺跡群の修復にあたっては、このオーセンティシティを保ちながらおこなうことが国際的なルールとなっている。そのため修復はオリジナルを損なわないよう最小限にとどめ、新しい部材や近代工法の導入をできる限り避けることが求められる。しかし各国がおこなう修復は、それぞれのチームの理念に

沿っておこなわれるため、実際にはさまざまなアプローチが試みられている。例えばフランスの極東学院(EFEO)が手掛けたバプーオン遺跡では、基礎を安定化させるためコンクリートの擁壁を内部に設置し、その上に石材を再構築するという方法がとられた。日本国政府アンコール遺跡救済チーム(JASA)が手掛けたプラサット・スープラ遺跡では、建物自体が大きく傾いていたので、いったん建物の石材を全解



EFEO (フランス) によるバプーオン遺跡の修復

体し、基礎を再強化した後、石材を再構築する方法がとられた。このとき既に破損していた石材

は可能な限り補修して再利用しつつ、部分的には新材で補うこととした。中国政府アンコール遺跡救済チーム(CSA)が手掛けたチャウ・サイ・テポタ遺跡では、崩れていた建物の石材を再構築する際に、破損していた部材を大胆に新材に置き換えるという手法がとられた。



CSA (中国) によって修復されたチャウ・サイ・テポタ遺跡

このように実際の修復のアプローチは多様であり、その妥当性についてはさまざまな議論がある。それを調整する場として、アンコール遺跡保存国際調整委員会(ICCA-Angkor)という会議が年二回、定期的に開

かれている。ここには各国の修復チームに加え、カンボジア政府・アンコール遺跡保護管理機構(APSARA) およびユネスコが参加し、各国の修復事業の報告とその妥当性の議論がおこなわれる。しかし委員会として「こうすべきである」という方針が定められているわけではないので、実際には各チームの自主性に委ねられているのが現状である。

う西トップ遺跡の修復チームの二員として事業に携わり、そのなかで修復をめぐるオーセンティシティの議論に直面するという経験を得た。西トップ遺跡の南祠堂の修復において、当初は部分的な解体をともなう修復を予定していたが、実際には基礎が不安定であることが判明したので、最終的には全面的な解体をおこなうに至った。しかし委員会の場で、解体はオーセンティシティを損なうのではないかと、異議が示された。なぜなら、解体はある意味で現状を変更する破壊行為でもあるからだ。

それを受けてわたしたちは、解体は「調査修復」の理念に基づいておこなったものであると説明した。わたしたちは解体と並行して基礎部分の考古学的発掘もおこない、遺跡の構築プロセスの詳細を復元するという成果を得た。そのうえで、解体は単に修復のみを目的としたものではなく、その遺跡をより深く理解するためのものでもあることを説明した。こうした説明を経て、わたしたちの理念は委員会で一定の理解を得ることができた。



JASA (日本) によって修復されたプラサット・スープラ遺跡

実践から生まれる遺産保護 筆者は二〇〇六年〜二〇一四年度まで奈良文化財研究所がおこな



奈良文化財研究所による西トップ遺跡の修復

このように、修復をめぐるオーセンティシティの議論は必ずしも一定の規範があるわけではない。ケース・バイ・ケースで議論されることで、ゆるやかなコンセンサスが形成されていくのが、実態であると考えられる。文化遺産に関する理念は、まさに実践のなかから生まれてくるというべきを目の当たりにするエピソードでもあった。

